

小さな観光と関係人口に関する考察

～新潟県柏崎市高柳町荻ノ島集落を事例として～

新潟産業大学 経済学部 文化経済学科4年 山田 美菜
指導教員 講師 春日 俊雄

1. 背景と課題の提起

現在の日本は人口減少時代に入り、さらに地方圏では過疎化や高齢化に伴い地域づくりの担い手不足という課題に直面している地域も多い。これまでの地域づくりといえば、その地域を代表するような観光地を作り、観光客を呼び込んで経済の活性化を目指す取り組みや企業誘致、市街地の整備など主に「モノ」による地域づくりが行われてきた。しかしその努力にも拘わらず、多くの地域では未だ課題が解決されていない。その様な中、新たな地域づくりの手法として「関係人口」という考え方が注目されている。地域外の人材が地域づくりの担い手になるという考え方だ。2018年には総務省も“人口減少が先行する地域においては地域外の主体の力を取り込む必要がある”として、関係人口への着目が地域再生への糸口になる”という報告書を公表している。しかしながら関係人口は、観光などによる「交流人口」でも、移住した定住者を表す「定住人口」でもない、観光以上定住未満の中間的な概念を示す言葉として使われており、学術的な定義が不明確であるという課題点も見えてきた。関係人口は様々な学者が提唱しているが、提唱者によっては“自分との関係が強い人”、“交流人口より広い意味で使用する”、“地域外の主

体に地域の存続を担ってもらおうという過剰な期待”など異なる考え方があり、中でも一番多いのは“関係人口を増やす”という意見である。

そこで荻ノ島集落の「小さな観光を手法とした地域づくり」を事例に関係人口の実情を捉えて、そこから見えてきた可能性を基に、これからの地域づくりに有効な「関係人口のあり方」を提案したい。

2. 関係人口の経緯と概念

関係人口は2016年に高橋氏と指出氏によって提唱された新しい概念である。高橋氏は“交流人口と定住人口の間に眠る存在が関係人口”、指出氏は“地域に関わってくれる人が関係人口”と提唱し、そこから多くの学者に広まっていった。さらに2018年には総務省が「関係人口創出事業」を開始し、地方創生の目玉的施策として「関係人口の創出・拡大」を目指している。2016年以降数多く提唱されてきた関係人口の概念について、田中輝美氏著書「関係人口の社会学～人口減少時代の地域再生～」のなかで、小田切徳美氏は“関係人口は量的概念から関係性をより意識するべき”、“関係人口の関係とは関心（意識）と関与（行動）である”と提唱。指出一正氏は“人を数で語る時代から顔と名前を覚え

る時代”と提唱した。それらを踏まえて同書で田中輝美氏は関係人口とは“①特定の地域に②継続的に③関心を持ち④関わるよそ者”であると定義付けた。企業のように経済主体で無く、ボランティアの様に自発性メインでも無い新たな地域外の主体が関係人口の概念である。

3. 荻ノ島集落における事例を検証

新潟県柏崎市高柳町にある荻ノ島集落の「小さな観光を手法とした地域づくり」の事例を基に関係人口の本質について検証していく。

(1) 荻ノ島集落の概要

人口	25世帯 51名
<ul style="list-style-type: none"> ・高柳町の中心から南へ4kmの位置にあり、田んぼを囲むように家屋が建ち並ぶ環状集落と茅葺き屋根の家が特徴 ・集落中央の田は“マエダ”と呼ばれ、田と家屋・道路・用水路などが一体となった景観 ・茅葺きの宿が2棟、さらに交流施設が整備され、これらを含めて茅葺き家屋は8軒ある 	

(2) 活動の考え方

荻ノ島集落は「生活の場+生産の場+接客の場」が一体となっているため、村全体の総合的な取り組みが不可欠となる。そのため集落を外に開き、人と情報が当たり前の様に行き来することを長年行って来た。さらに外の人と協創して地域づくりを進めており、他の地域と比べて外部との交流を大切に考えている事が分かる。

(3) 「小さな観光」における経緯と関係人口に繋がる取り組み

1988年～1990年 ①萌芽期	<ul style="list-style-type: none"> ・お盆フェスタ ・荻ノ島秋祭り復活 ・西部百貨店池袋店「ちびっ子祭り」
1991年 ②模索期	<ul style="list-style-type: none"> ・茅葺屋根が高評価を受け、集落で「かやぶきの宿」を協議
1992年～1994年 ③立ち上がり期	<ul style="list-style-type: none"> ・かやぶきの宿公設民営オープン ・茅葺民家屋根補修を集落で実施
1995年～2007年 ④発展・定着期	<ul style="list-style-type: none"> ・MIT&早稲田大学ワークショップ ・全国茅葺きネットワークフォーラム開催
2008年～2010年 ⑤停滞・衰退期	<ul style="list-style-type: none"> ・かやぶきの宿運営態勢の再構築検討
2011年～2012年 ⑥模索期	<ul style="list-style-type: none"> ・集落ビジョン作り ・地域おこし協力隊受入れ、外部人材との連携
2013年 ⑦立ち上がり期	<ul style="list-style-type: none"> ・ふるさと村組合創立20周年 →交流を持続的振興に活かす ・不特定多数の交流→共に支え合う交流へ転換

<p>2014年～2018年</p> <p>⑧発展・定着期</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ I ターン留学「にいがたイナカレッジ」の受入れ ・ 共に支え合う農福連携、農地維持等の連携協定
<p>2019年～2020年</p> <p>⑨停滞・模索期</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新型コロナウイルス感染拡大によりかやぶきの宿の営業縮小 ・ 地域活性化の為の「かやぶきの宿」→ビジネス化への転換

(4) 交流の深化により関係人口の領域に入った地域外の人材

①の荻ノ島秋祭りの復活では、長岡市土合奉祭会メンバーの K 氏が中心となり応援団と共に毎年祭りを盛り上げている。②のかやぶきの宿公設民営オープンでは、元日本観光協会調査部長、現松陰大学観光メディア学部長の K 氏が継続的に来訪し、専門的知見で主体的にアドバイス、提案等を行っている。③のかやぶき民家の屋根補修では、十日町市の屋根職人 K 氏を中心に継続的に維持・補修をサポート。さらに移住者の若者への茅葺き技術の伝承・指導も主体的に行っている。④の MIT & 早稲田大学とのワークショップでは、元江戸川大学教授、国土審議会委員の S 氏に縁を結んで頂き、その後も継続的に地域づくりの情報交換や全国先進事例の現地案内などを主体的にサポート。⑧の I ターン留学「にいがたイナカレッジ」受入れでは、中越防災安全推進

機構と連携を結び、同法人の K 氏が中心となって、インターンシップなどを主体的にサポート。さらに共に支え合う農福連携では、横浜市の社会福祉法人 N 氏が中心となり、米の産直、新たな加工品の開発等を主体的にサポート。農地維持では新潟産業大学国際交流センターと連携し、モンゴル人留学生による継続的な草刈りや水路の管理、電気柵の設置・維持管理・撤去などをサポート。

(5) 事例検証のまとめ

荻ノ島集落は外部人材との交流による信頼関係をベースに、継続的な訪問や主体的なサポートが行われている。(3)、(4)で述べた様に「お祭り」、「茅葺き屋根補修」、「農福連携」など集落の大事な各分野にそれぞれ関係人口にあたる外部人材がいる。しかし人数は全ての分野でも7名しかおらず、関係の深さを重視してきた結果であり、決して人数が多い訳ではない。「共感→リピート→ファン」までは交流人口であり、さらに「ファン→コアのファン→主体的な支援者・応援者」へと深化することで関係人口の領域に移行していると考えられる。近年はこの7名がさらに友人等を紹介するなどし、新たな分野でも関係人口（主体的な支援者）が増えつつある。

4. 関係人口に関する提起

これまで見てきたように、関係人口とは「ただ増やす！」という訳ではなく、信頼関係を持ってこそ成り立つのではないかと考える。時間をかけて徐々に地域の各分野において外部人材と住民との関係を深めていく。さらに基本は「継続的な関心と具体的な関わり」が中心だが、「来訪型」「情報

型」「連携型」「ネットワーク結節点型」など主体的な様々なスタイルがあっても良いのではないだろうか。

5. 今後の検討課題

今回の研究を踏まえ、他の地域でも関係人口を築くには3つのステップを踏むことが大事なのではないかと考え「1. 地域外人材とのきっかけ作り」「2. 地域外の主体と地元の主体の信頼関係の構築」「3. 関係人口として更なる新しい地域価値を生み出す」を掲げたい。

数ではない、人と人との深い繋がりをベースに協創して良い地域をつくる。これこそが関係人口を活かした地域づくりの本質なのではないかと考える。

※1 小さな観光の定義

地域社会（観光地以外）の中で地域を外に開いて、人々のエネルギーチャージの「場」と「機会」を提供し、来訪者も受入れ者も共に幸せ感が持てる規模の小さな持続型交流・観光